

「不耕起栽培」が教えてくれる教育（その2）

岡山理科大学
洲 脇 史 朗

揺らぐ教育界で地に着いた教育をするためには、確かな「教育理念」が必要である。前回は、その理念の一つとして厳しい教育の場を設定する「不耕起教育」を提言した。そして今回は、厳しい教育の場を設定しにくい学校現場の実態に即した「半不耕起教育」を提言する。

また、今年度不耕起教育の具体的事例を求めて訪問した、小・中・高等学校の中から3校の事例を紹介する。

1. はじめに

今まさに教育界は揺らいでいる。このような時期にこそ、我々教師は確かな「教育理念」を持ち、揺るぎのない教育をしていかなければならない。確かな「教育理念」を持った教師は、たとえその理念が実施し難い状況にあっても、その確かな自信が子どもたちに素晴らしい成長を約束する。つまり、今我々教師が何をおいても取り組まなければならないことは、確かな「教育理念」の獲得である。そして前回、この理念の一つとして厳しい教育の場を設定する「不耕起教育」を提言した。

しかし、厳しい教育の場を設定することが困難な学校は多い。このような現状を考え、今回は実現が比較的容易な「半不耕起教育」を提言する。

また、今年度は夏休みを利用し、「不耕起教育」の参考となるような事例を求めて数多くの学校を訪問したが、今回はその中から小・中・高等学校各1校ずつの事例を紹介する。

2. 前回のまとめ

前回述べた「不耕起栽培」が教えてくれる教育の概略は次のようなものである。

冷害に強い稲作を目指していた稲作研究科の岩澤氏は、冷害で大部分の稲が実をつけなかった年に東北地方を訪問し、畦に近い稲だけが実をつけていることを発見した。田んぼで畦の近くは耕耘機の歯が入らず耕せていないことが多い。このことから岩澤氏は、苗は耕していない堅い田んぼに植えることで、冷害に強くなるのではないかとヒントを得た。その後の研究で、稲は堅い田んぼに根を張ることで野生化し、冷害や病害虫に強くなることが判明した。岩澤氏はこの耕さない農法を「不耕起栽培」と名付けた。

しかし意図的に、堅い田んぼに通常の苗を植えてみると、植えるのもやっかいな上に、せっかく苦勞して植えた苗も十分に根を張らない。それでもなんとか実りはするが収穫が半減する。現在一般の農家が使用している苗（稚苗）では歯が立たないのである。そこで岩澤氏は、昔の農家が使っていた苗（成苗）に着目した。しかし、昔の成苗は確かに稚苗よりも勝っていたが、まだまだ十分とは言えなかった。目指す苗の育成には大変な努力を要したが、やがて岩澤氏はこれらの苦難を乗り越えて、堅い田んぼに根を張ることのできる強い苗の育成に成功した。

この「強い苗を作り堅い田んぼで野生化さ

せる不耕起栽培」は、人間の教育にも多くの示唆を与えている。私はこの示唆に基づいた教育を「不耕起教育」と名付け、前回紹介した。そこでは田植えの時期を中学校1年と位置づけている。

「不耕起教育」の骨子は次のようなものである。まず、家庭教育から保育園、幼稚園、小学校までは、愛情をそそぎながらもしっかりと子どもを鍛えて、耕していない堅い田んぼに根を張れるだけの強い苗にすること。次に、中学校1年で多少強引に堅い田んぼへ移植し、中学2年以降は支援はするができるだけ手助けを控えて、最終的には「全部自分たちでやれ」と、堅い田んぼである厳しい環境にしっかりと根を張らせることである。こうして、堅い田んぼに根を張った子どもたちは野生化し、予測できない冷害や病害虫にも強いたくましい成人へと成長していく。

3. 「半不耕起栽培」

しかし、稲作でも困難な「強い苗の育成」は、人間教育ではさらに困難さを増す。生まれてから、過剰に手取り足取りされてきた現在の子どもたちを、強く（耕していない堅い田んぼに根が張れるまでに）鍛えることなど不可能に近いことである。

それでは「不耕起教育」は現状では無理な教育なのであろうか。また、稲作においても弱い苗ではもう野生化させることはできないのであろうか。私は、この解答を得るために平成17年5月、再び千葉県佐原市の岩澤氏を訪れた。このとき、岩澤氏は弱い苗でもある程度野生化できる「半不耕起栽培」という栽培法があることを教えてくれた。

それは田んぼの表面を浅く（5 cm ほど）耕す農法である。これだと根の一部は耕した柔らかい層へも伸びるため、弱い苗でも成長できる。そして堅い層へも根を張ることによってくらは野生化する。まさに私の目指すところ

である。

ただしそこには大きな条件がある。田植えの際、5 cm 以下の堅い層に達するように移植しなければならないということである。それより浅いと、根は横着をして柔らかい層に広がるばかりで、下の堅い層には突き進まない。このため野生化しないどころか、実りの時期には実の重さに耐えきれず倒伏する。要するに、柔らかい層と堅い層の両方を用意した場合、放っておけば柔らかい層にしか根を張らないのだから、多少強引であっても堅い層にも根を張るようにし向けなければならない。

そこまでしないのなら、深く耕して多量の農薬を散布しさえすれば、耕したところまでは根を張り病害虫も近寄らず、とりあえず収穫できるのであるから、今までの慣行栽培の方が安心である。ただし野生化はしない。

4. 「半不耕起教育」

「半不耕起栽培」と同様に、「半不耕起教育」が考えられる。社会や多くの家庭で底が抜けているのが現状であるから、保育園、幼稚園、小学校の教師がいくら頑張ってもそこには限界がある。したがって、ほとんどの中学校は弱いままの苗を多く受け入れることになる。このような状況では、いくら野生化させるためとは言え、子どもたちを非常に厳しい教育環境に移植してもあまり意味がない。それよりも、やさしい教育環境も用意して、ほどほどの野生化を目指した方が良い。これが「半不耕起教育」である。

稲作では、田んぼの表面を5 cm ほど浅く耕してやり、その柔らかい層に根を張らせることで、ひ弱な苗に元気をつけ、同時にその下の堅い層に根を張らせることで野生化させた。教育でも同様で、手取り足取りするやさしい部分を設けて、ひ弱な生徒に元気をつけ、同時に「おまえたちでやれ」と言う厳しい部分も設けて野生化させるのである。耕す深さ

(手を貸す程度)は生徒の実態に合わせればよい。

ただしそこには半不耕起栽培同様大きな条件がある。最初から、耕していない堅い(手を貸さない厳しい)層にまで苗を差し込んでおかなければならないことである。そうしなければ苗は堅い厳しい層には根を伸ばさず、手取り足取りする柔らかい層にだけに根を伸ばし、やがて実りの時期に倒伏してしまう。このことを半不耕起栽培は教えてくれている。

要するに最初から、「自分たちでやれ」という厳しい箇所を、少しでもよいから必ず作っておき、その箇所だけは緩めることなく強要する強さが必要である。厳しい環境を用意したからといって、それを強要する強さがなければ、ごまかしの成長を促し、かえってマイナスである。それならば慣行栽培同様、今までの手取り足取りに徹した慣行教育の方が無難である。ただし野生化はしない。

4. 東京都足立区立弘道小学校の事例

弘道小学校のある足立区は東京都北東部に位置するベッドタウンで、学区域は主に住宅街であり、同校は各学年2クラスからなる中規模の小学校である。また、弘道小学校は水戸の弘道館の精神を受け継ぎ、明治11年開校以来128年の歴史を持つ。このため保護者は、祖父母の代から同校に通う家庭と、新しくやってきた家庭に二分されており、学校と地域の人々との交流も深い反面、学校教育に無関心な者も多い。

弘道小学校は平成15年度から文部科学省の「学力向上フロンティアスクール」に指定され、地域、家庭、学校ぐるみで学力向上に取り組んでいる。私は平成17年9月13日に同校を訪問して、川上彰久校長からそれらの詳しい話を聞くことができた。

弘道小学校では、二学期制や4年生以上の

教科担任制、習熟度別授業、20分間の朝学習(チャレンジタイム)、夏休みの学習相談など数々の取り組みを行っており、地域や家庭の協力を得ながら、学力向上に向けて日々努力している。

(1) 朝学習(チャレンジタイム)

弘道小学校の授業前20分間(8:20～8:40)は次のように定まっている。

月曜 児童朝会
火曜 漢字、計算、英語活動
水曜 新聞活動、読書、スピーチ
木曜 児童集会
金曜 漢字、計算、英語活動、他

特に火水金のこの時間を「チャレンジタイム」と呼んでいる。

漢字と計算は各学年ごとに級を設けてテスト形式でチャレンジさせている。各級は学年の単元と連動しており、単元終了後の復習が主な目的である。6年の場合漢字は1～40級、計算は1～20級を設けており、それぞれ10問程度のテストを行う。

このチャレンジタイムに向けて子どもたちは家庭学習して来る。単元の進行に合わせているため先の級に進むことはしないが、不合格の級は次回に再挑戦させたり、夏休みや冬休みを利用して遅れを取り戻している。このチャレンジタイムの感想を保護者は次のように寄せている。

チャレンジタイムの感想

- ・1段階ずつ目標ができ、学習がしやすかったと思う。
- ・子ども自身が個々に競争心を持ち、合格に向かって前進することはいいことだ。
- ・友達から遅れると、家で頑張って練習するため、以前より努力することが多くなった。

- ・間違っているところの直しをしなけれ
ば実施の効果は無いと思う。

またこの時間は学年によって異なるが、英語活動、新聞活動、読書、スピーチなども行われており、その感想を保護者は次のように寄せている。

英語活動などの感想

- ・朝から充実した時間が過ごせて良い。
- ・少しの時間でも、その活用法がすごく素晴らしい。
- ・英語を教えていただいた日は、家でも学習の話をしてくれた。
- ・自分のスピーチの内容を話してくれる
- ・自分で新聞を書いたりして大変良いと思うし、力が付く。

漢字や計算の合格状況、新聞活動やスピーチの内容などはその都度ファイルにして保護者に連絡されると同時に、後述の「基礎学習カード」にも記録される。

(2) 夏休みの学習相談

同校は家庭との連携を強くするため、夏休みを重要な時期と捉えている。夏休みには家庭訪問を行うほか、学習相談を設けて、子どもたちの補助学習を支援している。水泳教室などは多くの学校で実施されているが、同校ではこのほかに、1・2・3年の学習相談(各8日)、3年以上の書道教室(5日)、4年以上の漢字教室(10日)、算数教室(10日)、理科・社会教室(9日)、図工ポスター教室(5日)、全学年の読書教室(10日)、リコーダー教室(5日)、健康質問教室(4日)など多彩なメニューが用意されている。子どもたちは好きな教室に自主的に参加するのだが、これも三者面談で話し合われた夏休みの目標を、学校、子ども、保護者がはつき

り意識しているからこそできることだ。

これまでの夏休みは家庭が丸がかえだったが、平成15年度からは学校も手助けしようと様々な学習体験を用意した。学力向上に直接結びつかないものもあるが、学校としてもこの子にこれだけのことをさせたいという思いで、いろいろなものを準備した。

平成16年度の学習相談は延べ87回行い、児童一人当たり平均13日参加した。

(3) 「家庭学習のすすめ」

いくら学校が努力していても、保護者の協力無くしては成り立たない。平成16年6月に足立区教育委員会が実施した調査で、同校保護者の「学校への参加意識や家庭のしつけ」について、十分と言えない状況(足立区の平均をやや下回る)が浮かび上がった。

学区域は、学校の教育に対して協力的な家庭と、学校に任せきりの家庭に二分している状況がある。「今、学校としての課題は、保護者とのような協力関係を作って行けばいいのか、家庭にどう投げかけたらいいかということです。」と川上校長は言う。

そこで川上校長は、平成16年度からA3判3つ折りの「家庭学習のすすめ」というパンフレットを作成し、全家庭に配布した。ここには、「教育の基盤は家庭である。学力向上の施策をさらに進めるために、家庭と地域社会、学校が教育の役割を分担し、その機能を果たしてこそ充実できる」という川上校長のメッセージが書かれている。さらに、家庭での学習時間の目安や、読書・漢字・計算・心づくり・健康と言った項目について、家庭での学習のポイントや生活習慣のアドバイスも示されている。保護者からよく寄せられる質問はQ&Aとしてまとめ、分からないことがあれば担任が個別に対応している。

また学年ごとに「学力向上のための取り組み」というパンフレットをタイムリーに配布している。そこには、「弘道小学校では学力

向上を図るために、次のように取り組みます。つきましては、参考にしながら、お子様の実態に応じて家庭学習を充実させていただきたいと思えます。」として、学力検査の結果の分析、学校での学習の進め方、家庭での学習の進め方を教科ごとに説明している。

さらに、教科担任通信も頻繁に出されており、教科担任制のメリットや授業の進め方、子どもの反応などが詳しく紹介されている。

(4) 基礎学習カード「かがやき」

また夏休み前に三者面談を行い、夏休みの過ごし方について家庭と話し合っている。ここで使われるのが「かがやき」という基礎学習カードである。同校では二学期制を実施しているため、前期の通知票が渡されるのは10月である。その間の学習状況を保護者に知らせるために、また夏休みを視野に入れた学習指導を行うために、この基礎額種カードを補助的に使っている。基礎学習カードは、6月、10月、12月、3月の年4回保護者に渡される。週3回の朝学習の時間(20分)で行っているミニテストの「漢字マスターカード」、「計算マスターカード」の進級状況や生活面での自己評価、さらに水泳や読書などの記録や目標を子ども自身が記入するように欄が設けられている。結果を知らせるだけが基礎学習カードの狙いではない。カードは教師と保護者、子どもが共に話し合い、目標を決めてどう生活していったらいいかを意識づけるためのものであり、学習や生活の情報をもとに家庭と交流するためのものとして活用している。

(5) 子育て支援委員会

同校は128年の歴史を持つだけに、学校の取り組みに関心を持っている地域の方々も多い。祖父母や父母も同校に通い、「自分たちの通った学校をよくしたい」という気持ちが強い。そこで平成14年度から「子育て支

援委員会」という組織を立ち上げた。これは家庭と地域と学校の三者で健全な子どもを育てるという発想で組織された活動である。学習支援、図書などの校内活動のほか、問題を抱える子どもの相談などあらゆる場面で、地域の人たちがボランティアで活動している。例えば、学習支援ボランティアには、総合的な学習の時間や家庭科、英会話などの授業支援、花壇の世話や育て方の指導をする花結び活動、和太鼓やブラスバンドなどの文化交流活動などがある。図書ボランティアは担任と共に子どもへの読み聞かせや図書のアドバイスのほか、図書室の整理まで引き受ける。いずれも、地域の人たちが自分の得意な分野で、自分のやりたいことを行っていく自主活動である。

子育て支援委員会は、子どもが教育を受けられる条件や環境整備をしていく上で、非常に大きな役割を果たしている。今日の学校教育は、地域の教育力を総合的にどう高めるか、学校と家庭、地域とが一体となって子どもをどう育てていくかが大きな課題である。その点で弘道小学校は非常にうまく行っている事例である。

5. 東京都府中市立府中第3中学校の事例

府中第3中学校のある府中市は東京都の西部に位置し、人口は約23万人で、建武の中興で活躍した新田氏とゆかりのある市である。

府中第3中学校では、中学1年の1学期に、学習習慣と生活習慣を確実に定着させる指導を展開している。私は平成17年8月3日に同校を訪れ、渋谷政夫校長と清水肇教務主幹から詳しい話を聞くことができた。

中学校へ入学してくる子どもたちは、我々教師が思っている以上に小学校と中学校とのギャップに悩まされている。不耕起教育では中学校1年を田植えの時期と定め、強引に厳

しい環境へ移植するため、このギャップはさらに大きくなる。しかし、入学前から指導を始めることで、このギャップをある程度埋めることも可能であり、府中第3中学校ではそのような取り組みを行っている。

(1) 新入生説明会

府中第3中学では毎年2月に、4月に入学してくる小学校(4校)の児童と保護者を同校に集め、「新入生説明会」を実施している。新入生向けの説明会は、どこの中学校でも行われており、特に珍しいものではない。しかし、同校の説明会が他校と異なるのは、説明会の場で生活指導を開始することと、春休みの宿題や、家庭学習の状況を記録する「学習マラソン記録表」まで課していることである。高等学校のそれも普通科では、入学前に宿題を課すことはむしろ普通であろうが、公立の中学校ではほとんど聞かない。まして「学習マラソン記録表」のような物まで課す中学校はない。

宿題の教科は国語、算数、作文であるが、「学習マラソン記録表」へは、3月初めから春休みにかけて、国語、算数、理科、社会の各教科を毎日どれくらい勉強したか記録するように指導している。記録表は入学時に提出させ、担任がチェックする。「こうした入学前から家庭学習の記録をつけることで、学習習慣の形成に大きな効果があがっています。」と渋谷校長は明言する。

また、生活指導もこの時点から始めている。説明会に出席した児童たちは落ち着かず、並ぶこともできない。そこで、列の作り方やお辞儀の仕方から指導する。保護者からは、「まだ中学生にならない子どもたちに、なぜ中学校が生活指導をし、家庭学習の時間まで記録させるのか？」という疑問が多く寄せられるが、「子どもたちに生活面や学習面で自己管理ができるようになってもらうためのものです。」と説明し、とにかく強引に進めている。

ここでの強引さが後々良い結果を引き出すことを、府中第3中学校の教師たちは体得している。

同校がこのような初期指導に力を注ぎかけは、7年ほど前「学校の荒れ」に直面したからであった。オートバイで校庭を走り回ったり、授業がほとんど成り立たないケースもあったという。どこの学校でも共通して言えることであるが、荒れている生徒の多くは、学力面と生活面の両方に問題を抱えている。学力不足と生活の乱れが互いに作用しながら悪循環に陥り、荒れをますます大きくしている。したがって、荒れを克服するには、学習習慣と生活習慣の両方の確立が必要である。「ですから新入生説明会でも、学習マラソンなどの学習指導と同時に、生活指導もスタートさせるのです。」と渋谷校長は言う。

さらに渋谷校長は、「かつての中学校の荒れは、中学校2年生がピークだといわれましたが、今は小学校でも学級崩壊が頻繁に起こる時代ですから、中1からでも荒れは始まります。また学習面でも、小学校との授業のギャップを感じて授業に乗り遅れてしまう生徒が、毎年必ず出てきます。生徒が落ち着いて勉強や中学校生活に取り組める環境を作り出すためには、この入学前指導と中1の1学期の初期指導が非常に重要になっています。」と言う。

(2) 宿泊オリエンテーション

初期指導の中で最も大きなイベントが、入学式が終わって間もない4月20日前後に行われる、2泊3日の山梨県八ヶ岳「新入生宿泊オリエンテーション」である。八ヶ岳には、府中市が所有する宿泊施設があり、格安で宿泊することができる。府中第3中学校はこの宿泊オリエンテーションに、一般的な体験学習の他に、同校独自の学習習慣や生活習慣の確立を目的としたメニューを組み込んでいる。中学1年の4月に、しかも宿泊先で学習

会までするケースは珍しい。しかし、「このオリエンテーションを通じて真の府中第3中生になる」と渋谷校長は明言する。

生活面では、外部の人と接するときのあいさつや礼儀の大切さ、そして集団行動や時間を守ること、さらには掃除の仕方まで徹底的に指導する。学習面では家庭学習を想定し、各教科の勉強法についての説明を受けた後、静かに黙って課題に取り組むことが求められる。レクリエーション的な要素はゼロというこの行事を通じて、生徒は基本的な生活習慣や自己管理能力、学習習慣など、中学校生活で必要とされるものを身につける。「宿泊オリエンテーションの前と後では生徒は見違えるように変わります。入学当初は、授業に対する考え方や心の準備が不十分な生徒も多い。しかしオリエンテーション後は、どの生徒も授業を集中して聞けるようになります。」と渋谷校長は胸を張る。

(3) 学習マラソン記録表

もちろん宿泊オリエンテーションの後も、学習面と生活面の両方での指導は続けられる。新入生説明会で配った「学習マラソン記録表」は入学後も引き続き記録する。記録自体は、その日家庭で学習した教科ごとの時間、その合計、4月から通した家庭学習時間の累計、そしてその日の簡単な反省だけであり、それほど負担はない。

4月からの累計で、1年生は年間700時間、2年生は1000時間、3年生は1200時間の家庭学習をこなすことが目標として設定されている。1年生の年間700時間は、1日平均2時間であり、かなりハードルが高いが、半数以上の生徒が目標をクリアするという。毎日の朝会で記録表を提出させ、担任が個別にフォローしていることも、生徒のやる気を高める効果を発揮している。日々増していく累積時間が、「さらに頑張りたい」という意欲を引き出しているようである。

(4) 学年便り

一方生活面でも日々の細かい手だての連続である。今の生徒は人間関係づくりが下手で、ちょっとでも不愉快なことがあると、すぐに暴言を吐く。それがいじめやトラブルの原因となる。そこで、乱暴な言葉を吐く生徒がいると徹底的に指導する。スタート時に強い指導で、荒れやいじめの芽を摘んで、落ち着いた状態を作り出す。そこで初めて生徒は余裕ができ、自分と同じように、悩みを持ちながらも頑張ろうとしている仲間の存在に気付く。

管理教育だと批判する見方もあったが、浮かない表情をした生徒がいたら、すぐに先生方で対応策を話し合い、不登校の生徒についても、教師全体で情報や方針を共有して、生徒一人ひとりをきちんと見ているから、生徒も分かってくれる。教師の思いが生徒や保護者に伝われば管理教育だと言う者もない。

その思いを伝えるのが学年便りで、どうしようもなく荒れたときから出発し、生徒に要求したいこと、保護者に伝えたいことを包み隠さず発信しようと思って始めた。今学校で何が起きているのか、学校をどうしたいのかを正直に書くのだから勇気がいったが、やってみると不思議なくらい問題行動がなくなったという。

文章は下手でもいいから、書き続けることが大切である。発行し始めて半年ぐらい経ったとき、授業は落ち着き、廊下から菓子袋やチューインガムが消えた。今はどの学年も「学年便り」を精力的に発行しており、教師と生徒、学校と保護者を結ぶコミュニケーションツールの役割を果たしている。

中学1年の一学期という忙しい時期に、生徒に対して細かい指導をしていくのは教師にとって大きな負担になるのは事実だ。しかし、この時期にどれだけ生徒の指導に力を注げるかが、小学校から中学生へとスムーズに移行させる鍵になることを、府中第3中学校の実

践が証明している。

6. 鹿児島県立川内高等学校の事例

川内高等学校のある川内市は鹿児島県北西部に位置する人口約73000人の中堅的な市であり、川内高等学校は生徒数が1000人弱の普通科のみの大学進学を中心とした高等学校である。

鹿児島県立川内高等学校では、10年ほど前から生徒の自主学習の充実を目指した取り組みとして、「学習方法習得体験学習」と「放課後自主学習」を行っている。私は、平成17年7月25日に同校を訪れ、進路指導部主任の海江田教諭から貴重な意見を聞くことができた。

同高校の取り組みは、文科省や教育委員会等の指定を受けたものではなく、「進学校でありながら学習に対する意欲が希薄な生徒が多く、それらの生徒をなんとかしなければ」と言った、教師たちの自然の要求から生まれたものである。それだけに継続性の強い取り組みとなって確実な成果を挙げている。

(1) 川内高等学校の現状

川内高校の大きな課題は、生徒の学力の二極化現象であった。偏差値57～58辺りと45～46辺りに大きな集団ができています。これら集団の間には、学力もさることながら、学習に対する意識の差がある。下位集団の生徒には、自ら学ぼうとする姿勢が乏しく、そのまま放っておけば、漫然とした高校生活を送ってしまう。こうした生徒が入学してきている背景として「塾」の存在を挙げている。中学校時代に学習が身に付いていない生徒でも、中3生になれば川内高校への入学を目指して塾に通うようになり、入試をクリアできるだけの受験学力を身につけて進学してくる。しかし、塾では与えられた教材をこなす学習を中心にしてきているためか、本来最も

大切である自学自習力が養われにくい。そして入学後は、再び勉強しなくなる。

このような傾向は、全国の同様な中堅的な進学校が抱えてる悩みである。しかし、入学時にこのような生徒を受け入れる川内高校は、進学校として大変な実績を上げているだけでなく、人間としても素晴らしく成長した生徒を数多く送り出している。その背景には生徒を積極的に学びへと向かわせるための取り組み、「学習方法習得体験学習」と「放課後自主学習」とがある。

(2) 学習方法習得体験学習

同校では毎年4月、新入生を対象に「学習方法習得体験学習」を実施している。1年生の多くは、各教科をどのように勉強すればよいのか、まだその方法を身につけていない。そこで学習方法習得体験学習によって、高校で必要とされる授業の受け方、予習・復習の仕方を説明し、実際に体験させることで、学習方法を体得させている。

平成17年度の学習方法習得体験学習は、4月11日、12日、13日の3日間に渡って行われ、国語・数学・英語に各110分、地歴、公民、理科には各50分の時間が割り振られた。教科ごとに、生徒にはまずノートの取り方や辞書の引き方、予習・復習の仕方をレクチャーし、その後、実際に予習をしてもらい、それを基に模擬授業を実施する。さらに模擬授業の後には復習をさせる。このように、予習、授業、復習のサイクルをミニ体験させることで、生徒はどのように学習に取り組めばよいかを理解し、体得する。

この学習方法習得体験学習を通して多くの生徒が実感するのが「高校の授業は、中学校までとはまるで違う」ということだ。この体験学習の一番の目的は、高校で必要となる学習方法を身につけさせることだが、同時に意識改革の意味合いも持っている。学習方法習得体験学習をスタートさせてから、生徒たち

の自宅学習時間が確実に増えた。これは「勉強しなければ」という意識が高まったことが理由だと思われるが、体験学習を通じて予習や復習のやり方が分かったから、勉強に取り組みやすくなったという面も大きい。何をやって良いか分からなければ自宅学習しようとしなないのは当然である。

宿題も同様で、宿題を課してもしてこない生徒が多くいるが、これはやる気がないからだけではなく、問題の解き方が分からないから宿題に取り組めない場合が多い。そこで川内高校では宿題を出すときに、必要な生徒に対しては、問題への取り組み方について、ヒントを書いた補助プリントを配布している。

同校では平成15年度からは、2年生に対しても、そして平成17年度からは3年生に対しても学習方法習得体験学習を実施した。ここでは、学ぶ内容の高度化に沿って、よりレベルの高い予習・復習の方法を身につけさせることを目的としている。例えば、2年生の国語の予習の場合、語句の意味や用法を調べておくだけでなく、段落に分けて文章の展開を整理したり、200字程度に要旨をまとめてみるといった、1年生とはまた違う学習が求められる。最初に身につけた学習方法をずっと続けていると、2、3年生になって成績が伸び悩む生徒が多く、生徒の学習段階に合わせて、教師が適宜学習方法についてアドバイスをすることも大切である。

次に、学習方法習得体験学習を終えた後の生徒と担当教師の感想を紹介する。

「第1学年の感想」

- ・改めて自分は川内高校生なんだと感じると同時に、中学校時代にどれだけ勉強していなかったが分かった。
- ・中学までは「復習」が大事だと言われたが、高校では「予習」が重要であることがよくわかった。

- ・ノートの取り方など細かく指導してもらい分かりやすかった。
- ・授業のスピードがとても速く、緊張感があることに驚いた。

「第2学年の感想」

- ・シラバスを用いて分かりやすく説明してもらい、なにか初心に戻ったような気がした。
- ・正直、2年生の授業を甘く見ていた部分があったが、そうでないことを痛感した。1年次の学習方法や学習量ではどうていついていけないと思った。
- ・1年生の時に崩れかけた習慣が立て直せる気がした。がんばろうと思う。

「第3学年の感想」

- ・学習方法習得体験学習を受けて改めて感じたのは、自分自身の弱さである。学習方法・学習時間不足の原因は自分自身の中にあった。いつもやる気ばかりが空回りしている自分の殻から抜け出せそう。
- ・自分は部活動を引退してからでも十分間に合うと思っていたが、とんでもないことに気がついた。
- ・今までのようないい加減な気持ちではいけないという熱い気持ちが先生方から伝わってきた。

「学習指導係教師の感想」

教師の側には、学習方法習得体験学習の取り組みに関して共通理解ができているとは言い難い状況がある。「改めてこ

のような場を設定しなくても、各教科の最初の授業でやれば同じことではないか」という意見もある。また、年度当初の慌ただしい時期の実施ということで教科によっては指導内容が統一されていないことがある。

一方、生徒の反省を見る限り、新年度の当初に、自分の学習の在り方を再度振り返り、気持ちを切り替えることは良いきっかけになっているし、生徒側の学習方法習得体験学習に対する意識は全体的に定着しつつあるように思う。

年度当初の慌ただしい時期ではあるが新たな高校生活・新しい学年を迎えるこの時期に、学習方法習得体験学習を通して、学習方法や学習内容を可能な限り早い時期に提示してやることで、生徒の不安が解消され、その後本格的に授業が開始されるまでに、予習を進める時間的な余裕も出てくる。

(3) 放課後自主学習

川内高校のもう一つの取り組みに、習得した学習方法を自学自習力へ結びつける「放課後自主学習」がある。これは、下位層の生徒が自学自習力を身につけるために設けたものである。学習方法習得体験学習によって学習の仕方を身につけた生徒が、実際に自主的に勉強するための場である。部活動引退後の3年生は全員参加が義務づけられているが、1・2年生も部活動未加入者の多くが自主的に参加する。1・2年生には補助教室が毎日18時まで開放される。

放課後自主学習では自学自習の姿勢を身につけさせるために、生徒に自分で勉強する内容を任せている。初期には1時間目にプリントを配って生徒に取り組みせ、2時間目に解説をしていた。すると生徒はその場では一生懸命勉強するが、それだけで勉強した気にな

り、自宅学習をしなくなる傾向が見られた。これでは本来最も重要である授業の予習や復習がおろそかになってしまう。そこで生徒に自分でやるべきことを決めさせることで、宿題や予習、復習に取り組める時間にした。生徒にただ教材を与えてやらせているだけでは、受け身の学習から脱却できない。生徒自身が学習に向かう環境作りが大切なのである。

さらに、放課後自主学習においては、「生徒に自分の力で勉強させる」という姿勢を徹底している。時間内は私語はもちろんのこと、教師に対する質問も受け付けない。自宅で勉強しているときと同じ条件を設定している。しかも周りに勉強しているライバルがいる分、自宅とは違って緊張感がある。こうして見ていくと同校では、受け身の学習になりがちな下位層の生徒に対して、まず学習の仕方を教えて（学習方法習得体験学習）、次に実践させる（放課後自主学習）ことで、受け身から自ら学ぶ学習へ生徒の自立を促そうとしていることが分かる。

また放課後自主学習で安心して自宅学習をしなくなる心配もある。それを防ぐために、同校では高等学校としては珍しく、学習の記録を毎日つけさせており、1週間分を担任に提出し、担任の指導をあおぐことにしている。

このように、学年初めの取り組みだけでなく、日々の地道な努力が川内高校を今日の姿に高めていることを実感した。

(4) 帰りのバスの中で

同校を訪問した帰りのバスの中で、偶然出会った同校の2年生3人（男2、女1）から生の話を聞くことができた。彼らは川内高校生としての誇りを持っており、初めて出会った私に「厳しい教育方針に最初は戸惑い、教師に対して反感も持ったが、学校の教育方針が理解でき、教師たちの熱意が分かるようになって、自分から努力するようになった。今

は先生方に感謝すると同時に、川内高等学校に来て本当に良かったと思っている。」と川内高等学校を熱く語ってくれた。彼らの笑顔が川内高等学校の現状を物語っている。

4. 今後の課題とまとめ

今回は「不耕起教育」の事例として、小中高から各1校ずつの取り組みを紹介した。しかしいずれも、私の目指す「不耕起教育」からはやや離れており、むしろ「半不耕起教育」の事例である。社会情勢から苗を確実に鍛えきれない小学校、鍛えられていないひ弱な苗を野生化させなければならない中学校や高等学校。このような現状の中で、今回紹介した3校の事例は、それぞれすばらしい取り組みであったと思う。

「不耕起教育」は、全体としては1つの素晴らしい教育理念であると確信するが、複雑な社会情勢の中、保護者の協力や校種間の連携が難しく、多様な児童・生徒が入学してくる学校現場では、その実情に合った取り組みにならざるを得ないのは当然である。しかし、その実情に合った取り組みの根底に、素晴らしい教育理念がなければならないことも確かである。

今回、せっかく多くの学校を訪問したのであるから、機会があればできるだけ多くの事例を紹介していきたいと思っている。これらの事例を参考にされて、個々の学校に合った取り組みをしていただければ幸いである。

参考文献

- 1) 「不耕起栽培」が教えてくれる教育：洲脇史朗、岡山大学算数・数学教育学会誌バビルス第11号（2004）
- 2) 不耕起でよみがえる：岩澤信夫、創森社（2003）
- 3) VIEW21小中学校版：ベネッセ教育総研（2005.1）
- 4) 研究紀要他：足立区立弘道小学校（2004、2005）
- 5) VIEW21中学校版：ベネッセ教育総研（2005.3）
- 6) 学習ノート他：府中市立府中第3中学校（2005）
- 7) VIEW21高等学校版：ベネッセ教育総研（2004.9）
- 8) 学習方法習得体験学習総括他：鹿児島県立川内高等学校（2005）

（2005.10.11日受理）